

プレス空知 2020年3月 「旅するピアニスト」 深井尚子

新型コロナウイルスがなかなか終息しない中、落ち着かない春となってしまいましたね。みなさまはお健やかに過ごしてはいかがでしょうか。

今月は、私がウィーン留学から帰国して2年目に再度、ロンドンに留学した時のお話をします。ピアニストに限らず、楽器奏者は、演奏技術の向上と音楽性豊かな演奏の2つの要素の獲得を目指し、日々練習を重ねます。私がウィーンに留学したのは、20歳ころでまだ若く、また、自分の未熟さを自覚していましたので、毎週、ウィーンの素晴らしい先生たちのレッスンを受けて、音楽的とは何か、音楽語法とはどんなことか、などを考えながら、1日8時間くらいの練習をしていました。ウィーン音楽院でのレッスンは、膨大なピアノ作品をとにかく、たくさん知ることが重要で、常に4~5曲のプログラムを抱え、技術的な問題は、よい演奏と結びつけて自然に会得するという内容でした。ウィーンの先生たちは、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームスなどを育んだウィーンという音楽都市に高い誇りを持っており、その音楽の都ウィーンで暗黙の了解としての音楽観を持っていました。システム的なテクニックのメソッドについてはあまりおっしゃらず、歴史的な音楽的決まり事を徹底的に教え込むという方法でした。私は、6年間で、ウィーン仕込の音楽の表現を会得していました。その後帰国し、東京で30人を超える生徒を教えながら演奏会を重ねるのですが、その間、自分の演奏には、何かまだ足りないものがあることを感じていました。

そんな時、留学時代国際コンクールで出会った、ロンドン在住のピアニストから、「ロンドンに立ちどころにテクニックを上達させてくれる先生がいる！」という情報が舞い込みました。アンジェイ・エスターハーギ先生という、すでに自身の演奏活動は行っていないけれど、「ロシアのメソッドを教える」ということでした。私は、30人の生徒を友人に託し、即、ロンドンに旅立ったのです。エスターハーギ先生が、私の足りないところを、きっと補ってくれると確信していました。

ロンドンでは、私がこう表現したいという理想的演奏の実現に足りないものは、指だけではない、身体全体をコーディネートしながら、楽に演奏するという、いわば、技術的な問題の解決であったことに気づかされました。エスターハーギ先生は、「君は、ウィーンでどのような音楽を実現したいか、頭ではわかっているはずですが、しかし、その実現には、もっと余裕を持って難しい箇所も演奏できるようにしなければなりません。」とおっしゃり、姿勢の矯正、腕の脱力と弛緩の方法、また、筋肉と骨格の使い方を具体的に教えてくださいました。ウィーンとロンドンで学んだことが、今の私の基礎になっています。